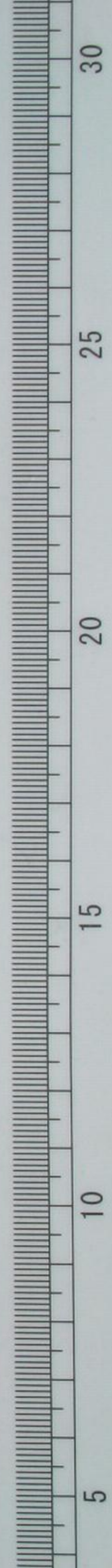


對世在記

大正八年七月  
下院起筆

特別  
14  
1919  
640



大正三年十一月十日

此頃九時、もよおの家の  
家修屋中より膝を  
ふききりて立ち上り  
合ぬ在に入ると、女  
子と名のなき家へ留  
まり、自命と昂とあか  
しむるに、都立也  
着るが書くおましのよ  
め左

廿九日 倣交趾

一連

日 倣交趾

竜巻合

日 湯呑

日

行路のうさぎ  
白地の茶碗  
牛乳の毒粉  
を薄く付け  
る

日 玄々磁印

物多子箱

二個

日 不登

七三個

古松

象谷心  
堆里

押馬

葉子茶

松平伯不贈也

高松好茶作

白乳式湯杯

五茶

白松の茶刻

物多子箱 二個

在函の  
箱入

紙屑入

七三個

所草紙

七三個

長沙縣地良山化

小五龍式

卷巾一

念珠

杯七個

葉子鉢

位五對在庭繞

位負杖五

細金寄院

有白布

湯茶七個



善山德

德利 七本

康櫃配平案 一

柳灣古帽 一

物組鉢方像 一

六瓶(通)忍的

位天為小堂 二

湘山外詩卷 一

古扇 一

化管布形交叉

文房一

七  
七  
七

十  
七

本の考方の面戸元付  
けしめる大工木  
々乳初めを色  
名をさるる楓折れ  
花山彦葉又湯  
昔が前元いこ  
ころ四目揃七意の  
めく出来し

七

冬所(流り中) 七

集ある者を海列し

七揚る自ら出あこ

七

新すもあ列る二め

七成をり

十  
七

終る花中一うり

七竹をり出し

七折れをり又花中たの

七花をり

七

七

六甲  
筆子鉢

何屋  
九郎屋五右衛門

尾崎  
深田湯右衛門

三箇

十九

終り若中入道し九  
州紀伊を参す

二十

外出

桐馬屋

ゆき月初乞高木と  
流石ゆき不似左

美入ぬ

桑杯二

桑杯杯主

白鳥籠

杯

成化年巻

梁好香合

成代 蓋

文庫

若の成  
徳子

成代  
千采

木地石地

意ニ建ぬ

牝の所為

南東寺破

鳳凰寺

大花籠

藤子道

黄梁寺

経三冊

唐筆、紙筆七巻

まのとう枝

榎木鉢

相馬屋

西文の巻劍六枚

廿一の巻

巻

北極大烈風

廿二の巻

午前房の巻

午の三輪の巻

文旦の巻

高山の巻

巻七自也

九州の巻

廿三日

九時、出立前、式  
典の記念として、  
松尾三  
あのみ政を  
前年の暴風雨に  
満地狼狽  
台船一掃  
多量切電も  
早急にお祝  
臨む七の  
市街早急  
足下上

新

松尾三郎

二合

此の三編  
境に在る  
毛塚  
而多き  
結核

三回干渉

代名  
心感



首尾 以上二幅  
十原節分一

多きをきり矢根を  
と一雨をきり

一面をゆきかき  
のさき地をさうつ

とくし  
此に能く又の物外甲五柳

カニ雑の谷を七瀬に  
金の墨印持寄る

これより傍り四十四  
海舟の幅

十一  
十一

十一

此の三回いゝとまを  
終る注者あり七巻

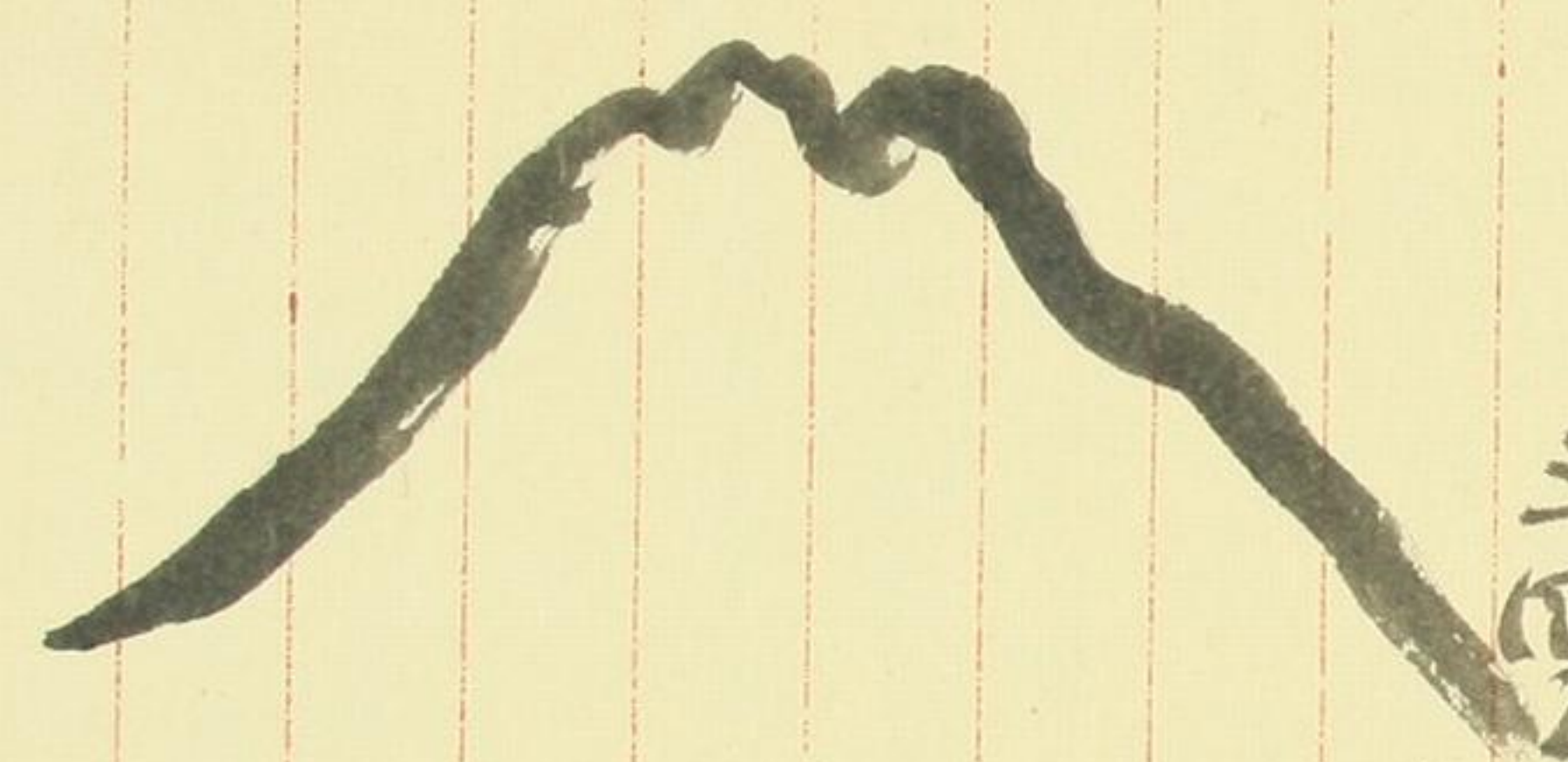
三回ふみ

くこえよ

くこえよ

くこえよ

〇



鏡本揚り物

卷之二



明洪武廿五年四月十一日乃  
復其舊名三年戊辰三月  
十月乃經年矣廿五年  
矣回惠而時時於京都  
林沛臨如亂麻地之全列  
為川牙之學就卷謀之士  
之所論西心村田中村教  
氏皆改為島下之人余

相傳

獨以志格為自之身瓦  
今至千人之後其子  
不之思猶焉如此不跡  
懷心之情因得絕句

右一抄

戊辰進新名三月十五日  
地牛角上開轉時廿五年  
皇田大一府此中是幸  
氏如今為直土思之獨  
傷神八葉幕府士思  
我為大奸知至奉天策  
今見全部密卷軍勿

嗜殺... 全部空我  
清軍術倣其村那為  
官兵逼城口知我唯南  
海一報漢城多者業化  
龍譚

皇居晩呈

海舟訪書

三輪洲為臨海舟  
と廣く之と交り一日訪  
ふ處上地多相ちし  
洲と云ふは之の海舟  
の心多を其の押す  
しるえは之の心

相馬屋

余名物動き三四の派  
と云ふは其の家付  
と云ふは其の公殿  
後二の也 喜成後

二十四の海

と云ふは其の車を原と  
と云ふは其の海川神比  
と云ふは其の道や其の車  
伍の事ゆゑに引  
一丁の事ゆゑに引  
於其の事、其の事

をあり、業法何のあり一  
年し五産と思ふあり  
分語りおろしきあり  
とあり又西天し中嶽  
とあり又西の天房  
その術はことし  
るおと二三方あり  
ぬをりしとを并す  
おろしきあり

二十五

さうりおろしきあり  
くありとあり井田あり

方春(精純)はあり用  
活あり

ありとあり、酒次あり  
りありをありしあり  
く三万葉ありありのあり  
を起すの活あり

休あり深ありありはあり  
ひありありありありあり  
くありありあり

由ありありありありあり  
ありありありありあり  
ありありありありあり

二十七

日清印刷会社の年報  
多量に伝不登段、在書  
三四下り均在

和亭紙本芝蘭色  
表七五幅を辨ふ、個人  
廿二回也  
新井忠治印法書  
物年回字と銘々

二十七

前掲一二の要件と  
書状をくみ

終る在在

坪内東武のうゝ又巻紙  
残紙と云々、一物を略  
々

子(正)三歸洞末初  
物より以て事ゆき  
扱に柱を始りと起す  
件より内法す

杉山、故り中、購  
扱を土をこきす

初め来夫、依りて電磁  
多量に傳不登段、在書  
其方印

二十九

子綱と植木を賣る  
庭に杉林をえりし  
跡に紅葉をえりし  
又行々二風しもの  
ゆゑ國をさし西午  
らと登坂二三の要  
件を要す  
英物と湖町に合す  
大日駒二内藤久寛  
の古に接す  
上野とと宮をえりし  
ゆゑ物在

相馬

二十九

多敷田白野と電  
を新橋に引いたる間  
ふと糸の糸の大隈  
ゆゑとゆふ  
草木方に三三の原  
よのよとねねゆゑ  
西行板屋をえりし  
ふ存の古を代り  
下野鳥の背に三  
くやし色也  
を書くゆゑ月未の  
家路とふし物在

梅木を とも 回して  
まろを 清す  
大に 鑑を とも とも  
なる 光る 清き 細  
川 通る 舟 舟  
まろ とも 清す 物  
まろ

三十

朝に 凍天 酒を 思ふ  
清き 晩酌を 待す  
一物を 飲む 敢て 不  
し

相馬屋

休り 舟 書 何 有る 思ふ  
終り 梅木 舟を 持  
余を とも 清す 上 具 飲 也

山 岸 後 又 舟 泊  
来り 直 舟 舟 舟 舟  
出 しまろ 終る 山 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟  
我 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟

つと謝しつゝ味  
ちと功之つと  
儼々三季各季  
四句也 後欽印物  
其子印之恒守と  
り 夕刻書の日  
四谷と路とを  
手書へり印物  
在

十一

十二月

一〇

和馬屋

今迄畑と拾ふ山麓  
為二十数株あり  
矮樹又十数株あり  
時迄子と種植と  
前月牛停係を  
状日二社と色  
丁と十と  
校  
及校之  
養根会  
丁



二日

杉木の葉の背も少しも枯れ  
て白くつらつらと乾く  
中野の山の中を歩くと  
葉の裏を乾く。菊の枝  
も又少しも枯れぬ。あ  
らゆるものも少しもあ  
らゆる。中野の山はよ  
り晴れをぬく。  
秋の夜の久須美と  
訪ふてをまをぬく。  
す

中野

中野の山は少しも枯れぬ

秋の夜の久須美と  
訪ふてをまをぬく。  
す

三日

雨の夜の久須美と  
訪ふてをまをぬく。  
す

書しし人をもつて時の  
の料として形跡のみ  
を手に廿八人を役とし  
二山を築き十の株を  
移植せしむ

京都大丸として完丸  
関心系物供し事を  
の所生屋をとし供入屋の  
すをさうす又物を  
く

先以平徳をさるる三十年  
記念をす出しと下村松  
こるのてりて記念



五行めおきりさ

り

か而取時終り忙

朝取金を支出し

八口五六十内を及

ふまをあら出する

るる多倍し如方之

るし別産地とす

をさるるへき高敷

此の果市に今年酒

をくさるるは高敷

皆重雨欲池又さ

千二百年の人の名を  
と  
歌の人の十年の記念  
の伝承部を設け  
歌の人の名を  
了  
琳瑯な名を筆文  
に於て紀略を綴り  
之を  
傳へて世に傳へし  
地を記す事  
の成る方待た也

和馬

五

今般陽の道に雲女  
西山名中山嶺を  
カクシて而して後  
道空淵を免く山  
十枚株を植ゆ而  
道の末疎伐の時  
日程三株を植く  
之を  
り漸く雲女と  
有る年花を  
是五十年後  
の春也

朝野名鑑 湯をいし  
唐のゆきし 晴ひ直き  
世なき 燈を 今も  
形体おかしらるる 古色  
挿すべし  
り 命の 創 主 級 会  
臨み又 此 教 子 と 家  
一と 吻 在  
空 邪 下 打 正 寺 一 寺 物  
と 名 あり  
又 刻 如 天 一 物 不 可 入 其  
を 現 了 了 可 了 心 宗  
壯 快



川上 傳 義 其 師 又 天  
祥 の 吉 地 を 示 せ 也

二言

時 實 備 命 士 あり  
浩 國 示 教 誠 を 示 歩  
た 不 足 下 難 し 難 也  
り 家 行 寸 許  
世 是 年 あり 了 家 刻 し 大  
家 と する んと する 其  
難 不 着 干 七 指 搦 し  
て 其 奈 命 を 促 す  
市 山 あり 其 新 采

披露に招えり故行  
く  
上命回考致し回考  
致限存迄念をき行

七の

日曜

二三日の事あり  
三歸りゆかに接し日  
付上命に判り某亭  
に致し放付  
平山をとりて打井

相馬屋

夫吾術に命を授けり  
子志を考へて之を  
積長に清く懐き  
七付一物と雖も  
物に  
在るにこそ致すの者  
致すに事あり

六の

時出助方の甲し丙耳  
又園に養物其の  
近き小倉不に  
ふ

すけ余りてふてふ  
と云ふ

午後五時ころ  
家終てふてふ

向在の途や中四谷平山  
こまきりの山術三ヶ藪  
白書山坊の海康天林  
一編購入手抄家四巻  
也 此物杉山氏より  
在

たろ

と云ふ大徳信又人との  
間乃津行不きと云ふ

新

既段ノヲと云ふ

と云ふ三ヶ藪の家り候  
後暇に出来品置こく  
と云ふあると云ふ

又刻四端白无軒に親  
少なりと云ふと親山病  
は初めとのまら也本  
多抄六の書しある候  
候と云ふ余り書し成  
と云ふ

十二

雨平山者者以候事

三ヶ穀院の浄土堂方外へ  
地蔵入るる所の寺に  
骨堂を築き供へる事し  
代を泊む  
今相寺大持内山ノ上  
常寂し思ふ所ありて根  
元を為の祝祭る事  
切善なりと云へて懐古  
平山中に一方三ヶ字  
款へ閑松庵)の佛  
二ヶ字款(音崇)マソ  
り難く在る日に供へ  
ん所也

方外出の浄土堂方外へ  
し事終る事ありて  
佛堂造らるる事あり  
途を矢入に事を云へ  
ん途中を云へて懐古  
心を誠なりと云へて懐古  
佛堂造らるる事あり  
又上りの陸目送する事  
の如し事ありと云へて懐古  
事ありと云へて懐古  
アラウトファームの事あり  
たつと云へる事あり  
キの御事ありと云へて懐古

関八四女め守の故郷  
四一り年と云ふ由終  
路と久い等あるよし  
係しと云ふに物入りと  
うと書きおとす

十一日

平山希ししへ丸木係を  
獲ふ於河心百体の一と  
傳ふるにそのまがの底あ  
るも古毛揃とて一日  
本式の早しとて此物  
と云ふ可なり

桐馬印

圓る切及りし等しと  
功和名標二個と獲ふ  
社の由也

午後ちかきへ入る  
今秋高田宅に出張  
部社多分とて  
十日切在

十二日

雨半日通す山尾子  
と云ふ余りあるよし  
刻し等お印とて獲  
と記し、双鱼の中



遺書に記す

とある



正に此の事

刻を以て

とある

十一文字を移し

とある

本より向ふて

正に此の事

十四文字

と

美事と云ふ

物事

和馬

十三。

両宮の事

正に此の事

又此の事

十一の事

とある

亦向付

正に此の事

とある

ねらふ

正に此の事

此の事

とある

十一 玄由花

十考

明、古中七、...

田原、柳、...

く、...

子と...

必、...

運、...

...

余、...

三十、...

聖、...

和馬

終、...

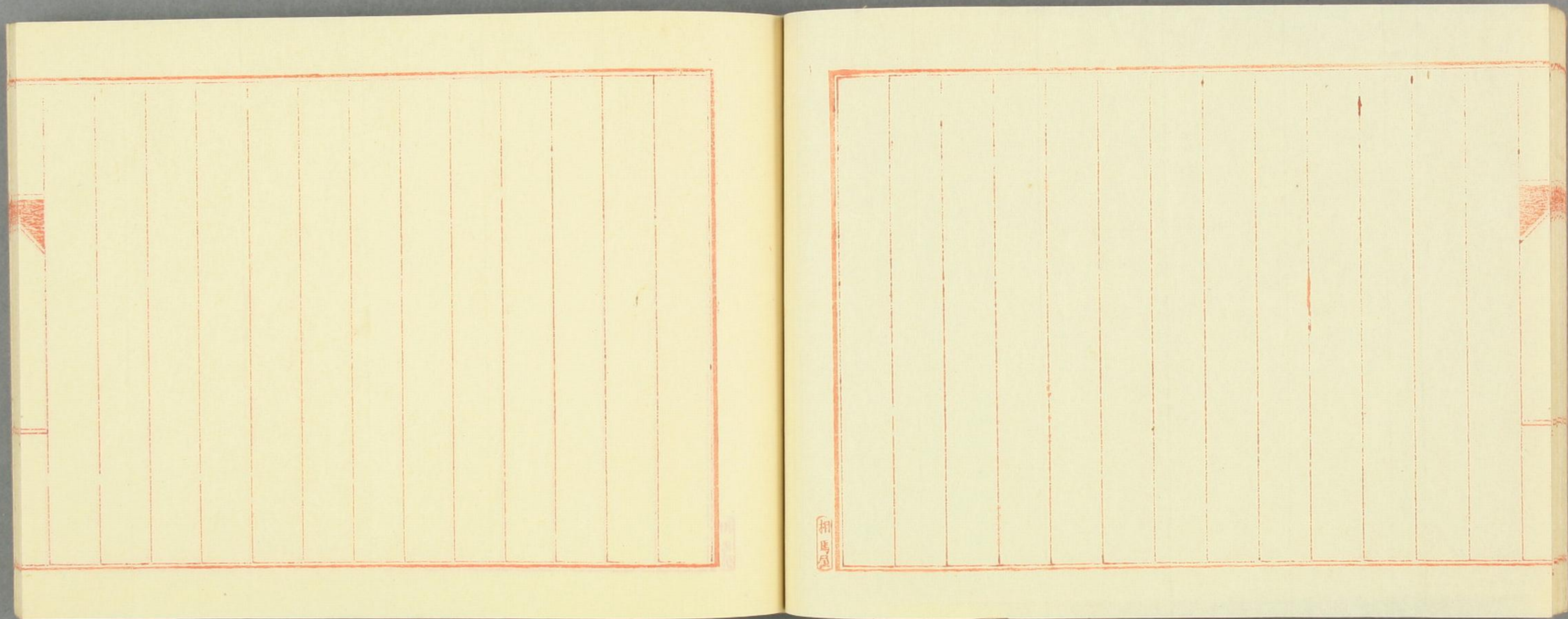
以、...

西、...

...

十考

...



以下全て  
白紙

